

## 五 邪見憍慢

正信偈の中に「弥陀仏の本願念仏は邪見憍慢の悪衆生、信樂受持すること甚だ以つて難し、難の中の難これに過ぎたるは無し」とある。この文は正信偈中、依経段の終り、つまり釈尊のみ教の終りにあり、ついで依釈段とて七高僧のみ教が出るところのその中間にある。そして依釈段の最後には「道俗時衆共に同心に唯斯の高僧の説を信ずべし。」とある。そこでこの御戒めは正信偈の全体へ通じたものであることが知られる。

信は弥陀にむかえば、本願を信ずるのであり、釈尊にむかえば、その教法を信ずるのである。そしてこの二つのことも「二尊のおん意に信順する」と、具体的には信心の一つしかないのである。だから信が獲られないのは、本願を信樂しない前に、み教を信じないのである。そしてその信じられない根拠は、唯、今の邪見憍慢一つにあるのである。邪見は邪な見識、憍慢とは自己を知らぬ高上り、自己肯定の我執に外ならない。かくて、邪見憍慢とは、教を聞かない、教をはねつけてゆく根強い自力疑惑の病相である。

大経の下巻には「憍慢と弊と僻怠とは、以つてこの法を信じ難し」とあり、如来会には「懈怠と邪見と下劣の人は、如来のこの正法を信ぜず」とある。つまりこれを集めると懈怠と憍慢と弊と邪見と下劣との五つになるのであるが、今はその中から邪見と憍慢とを取って造句されたのである。あとの懈怠と弊と下劣の三悪相も一緒にあるわけである。弊とは「わるいならわし」ということで誠に過去の悪い習慣が正法を聞かせないことである。又凡夫はものの好みが誠に下劣であり、ものの考へ方が下劣である。その下劣な為に正法を聞くことが出来ない。憍慢と僻怠とが一緒にあって、いわゆる憍慢界をつくる。たとえ正法を聞いても憍慢界にとどまり、前進して真実の涅槃界に入ることが出来ないと言われている。かくして、これらの悪徳は一つあれば皆あるのであつて、我等は皆これを持つていたのである。

褒められたら褒められて自己を肯定し、そしられたらそしられたで自己を肯定し、正法を聞かねば聞かぬで肯定し、聞けば聞いて肯定し、宗教家として売れ、ば売れて肯定し、売れなければ売れなくて肯定し、善をすれば善を肯定し、悪逆の淵に沈めば沈んで自己を肯定し、遂に自己を肯定して、始末がつかぬのが凡夫である。自力とはこの自己肯定の我執であり、この病原から来る病の容態が先の五つの悪相である。であるから、自力の病根のある者は、懈怠の故に精進して聞くべきを聞かないのである。弊悪に引きとめられて正法を聞く縁が開けないのである。下劣であるから宗教等に耳を借さないのである。たとえ聞いても邪見に囚われて耳に入らぬのである。正法の座に出ても憍慢なるが故に受付けないのである。かくて「邪見憍慢悪衆生信樂受持甚以難」といわれるのである。

真に邪見僣慢なる者は邪見僣慢であることを知らない。側の見る目にも気の毒なほど貧弱な思想と生活の持主が、妻子の前では、自分ほど賢い人間はないと威張り、勝手な庇理屈をならべて、妻子すら顔をしかめさす。暗い顔に頑固の性、家の中の癌であつてそれを知らない。一生を棒に振つたと泣く妻の訴え。邪見僣慢悪衆生！学歴があろうが、地位があろうが、御本人の一生も不平不満愚痴だらだら。人をも我をも幽霊屋敷の中におく。富士の山より大きい鎚で自力我慢を打碎かねばならぬものをそのまま持つて生きて行く。そうなればなるだけ、いよいよ自分の邪見僣慢が増してゆく。そのくせ自分の邪見僣慢はますます見えなくなる。

汽車の中で、森正蔵著『旋風二十年』を読む。日本の過去二十年の動きを書いた書物である。軍部は明治天皇が政治に關係するなど御戒めになつたのも聞かず、軍部独裁を成就して遂に国を滅ぼした姿が手に取るように書かれてある。忠誠々々と言いながら、陛下のみ心に随わず、独断と偏見と貪欲と名利と殺伐と無道義と党派相尅と、無智なる神がかりと、あらゆる悪徳を邪見僣慢に集めつつ突張つてゆき、遂に今日の日本にしてしまつた、戦慄の記録である。国民には一致団結を強いつつ、軍部の中では、皇道派だの統制派だのと、常に派閥を追つて相手を落し殺して、私闘を続け、反対意見の者は全て却けてゆく小心小胆、つまり大きな腹の人がなかつたのだ。誠がなかつたのだ。少しでも、真に国家を世界人類を愛する真心がなかつたのだ。無智なる野心野望しなかつたのだ。因果顛倒の妄想邪見、天何ぞ許さんやである。邪見僣慢の恐るべき、唯に一人一家庭のことではない。一国一世界もまたこれによつて無明五濁の大悪世を出現するのである。民族は今大懐悔の秋である。

邪見僣慢の心は、全ての教化をふりすて、自分の小さい力で生きて行かれると思ふ心である。独善の人、自分を過信する心、頭を下げぬ心、自分程事理のわかつた者はないと思ふ心、心の芽のとまつた心、冷たい心、こうした心の前には浄土は開けないで、地獄餓鬼畜生の三悪道の黒闇が開けて来るであらう。

聞くということ、聞其名号と聞くということ、平凡だけれども、正法を聞くということ、そこからのみ道が開ける。聞く機縁が開けてそして真に聞く。一生聞き開いてゆく。聞き得たとは、信ずること、本願大悲真実が聞えて来るままが信心歓喜である。その時、聞く心もまた、仏心が仏心そのものを廻向顕現せしめたのである。それ故に信心とは仏心であつて、智慧と大悲の一如なる心である。大悲の信心海といわれ、信心の智慧といわれる所以である。

聞くこと。唯聞くこと。初めは自力の心で聞いていても、ついには聞く心信ずる心そのものを、聞くことによつて廻向せられることがわかるであらう。

「信柴というは、如来の満足大悲円融無碍の信心海なり。」大悲は一切を円融する。とかす、とける、鉄は熱火に熔け、自力我慢我執邪見僣慢は大悲によつて融ける。自力我執がとける。心の底の自力の岩壁が融けて、彼岸の大涅槃への信心のトン

ネルが通入すれば、浄土の八功德水は、仏智満入と行者の心中を流れて、やがて汚濁の心情をつれて浄土に帰る。本願の道は下水道にしてまた上水道である。

とける一切がとける。現在がとける。過去がとける。未来がとける。困がとける。果がとける。無間地獄の釜がとける。鬼がとける。鬼の鉄棒までとける。皆とける。善がとける。悪がとける。善も凍れば悪であり、悪もとければ善である。地獄も鬼も皆氷の姿である。熱の前にはとける。とければ功德の水となつて、浄土の他にそぐ。本願海にそぐいで南無阿弥陀仏の名号の内容となる。

かるが故に聖人御本典に云く、  
「断というは、往相の一心を發起するが故に生として当に受くべき生なく、趣として更に到るべき趣無し。已に六趣四生の困亡じ果滅するが故に、即ち頓に三有の生死を断絶す。故に断と曰うなり。」と、一切が融けゆくことを今は断といわれる。とけてどうするか。御本典行巻に云はく

「海というは、久遠より己来、凡聖所修の雑修雑善の川水を転じ逆謗闡提恒沙無明の海水を転じて、本願大悲智慧真实恒沙万徳の大実海水と成す。之を海の如しと喩ふるなり。良に知んぬ、経に説きて『煩惱の水解けて功德の水と成る』というが如し」と。  
久遠劫来の凡夫の一切善も、一切悪も転じて本願真实の功德大実海水と成す。氷は転成されて水となり、煩惱は弁証法的に転成されて名号の功德と成る。

自力の否定は、そのまま全我の絶対否定である。大悲が円融するとは、絶対否定、信の自覚を通じて全否定を成ずることである。氷に対する熱、凡夫に対する如来、有限に対する無限、煩惱に対する智慧、大悲なくして絶対否定があり得ようか。

聞くこと、真に教を聞くこと、そのままが大悲招喚の声を聞くのである。この本願の招喚のみが、外に八万四千の闇の巷から大転回をとげしめて、浄土に向わしめたもう。この外向性の悪人が内転性の悪人に向きを変えた時、無有出離之縁の悪人と信知して、自力無効の自覚のままが大悲の心中に撰取せられる。その時一念に全てが円融する。しかしこの時、自証の心としては、はじめて自身の悪が見える。邪見憍慢な鬼とは我である。弊悪にして懈怠なる、下劣の人とは我である。大悲に徹すれば徹するほど、徳を身に獲得すればする程、五逆十悪の我を見る。

かくの如き矛盾の目己同一が信の自覚である。これを二種深信というのである。邪見憍慢悪衆生とは誠に私であった。それ故に、本願の救いは我に於て成就したのである。法からいえば全ての罪悪煩惱はとけて滅したのであるが、機からいえば煩惱具足の悪人とひれ伏したのである。親からいえば孝子になったのであるが、子からいえば親不孝の我にはじめて泣くのである。

世尊、涅槃経に於て、親殺しの罪に泣く子に、慚愧して念仏する者に地獄はないと説きたまい、それを聞いて無根の信を獲たる子は、永劫地獄にあるとも悔はないという。

邪見憍慢なる我に徹して念仏すれば、不思議や、心安らかなる世界が私をつつんでいて下さる。大悲真实撰取の中に、はじめて邪見憍慢悪衆生の我が姿が見える。